

文學士岡田正美著
永井一孝補

新式日本文法

東京 大日本圖書株式會社

8150-4440N

新式日本文法上卷凡例

一本書は我國の文法に關したる諸般の事項を叙述したるものにして、特に某時代に於けりし文法を叙述したるものにあらず。

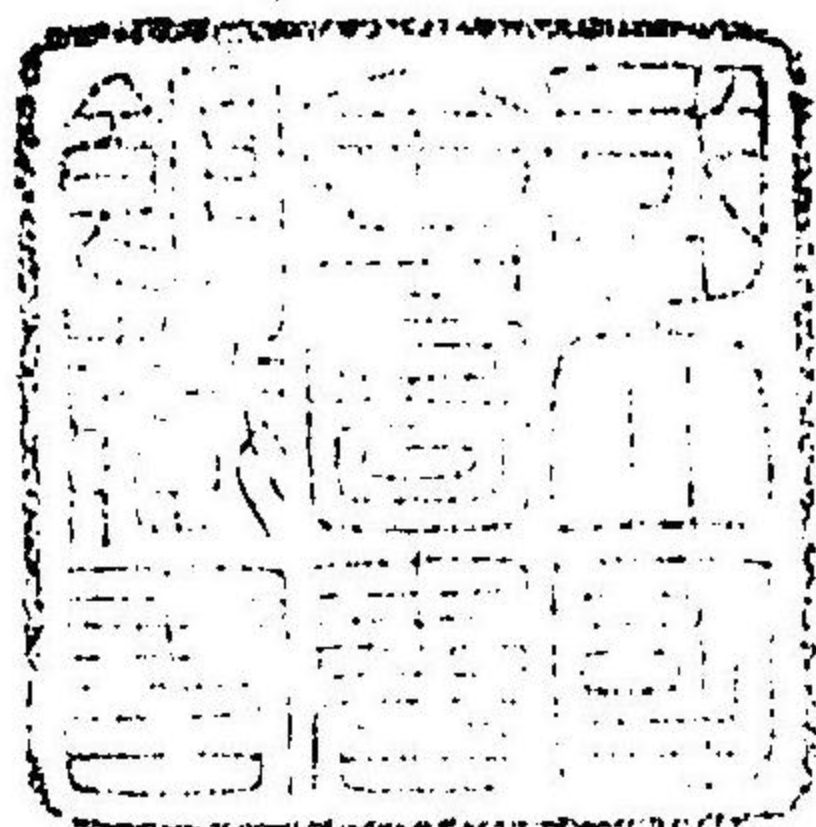
一本書は學說に於て名稱に於て又叙述の順序に於て、大に現在の諸文典と異なり。その叙述の順序の異なるは予が學ぶ者をして出來得る限り容易に我國の文法を會得せしめんとしたるに因るなり。その名稱の異なるはその學說の諸氏と予と異なるに因るなり。而して、又予が學ぶ者の彼と此とを混同し、又は彼を以て此を推して誤解に陥らんを避けんとしたるにも因るなり。その學說の異なるは予が西洋文法に拘泥せずして、別に我國の文法として叙述せんことを企てたるに因るなり。皆殊更に異を樹てゝ人の耳目を驚かさんとしたるに因るにはあざざるなり。

一本書に於ては主に言語の根本たる思想に就きて説きたり。故に學ぶ者は、本卷に於ては、主として思想の如何に注意すべし、字句の如何につきては甚しく注意することゝを要せず。

一本書に於ては思想に關する諸種の事項を會得すれば可なり。定義又は原理の類は一

凡例

(一)



337198

々精細に了解するには及ばず、漸次了解せんに任せおきて可なり。

一(問)(答)は必ずしも質問返答にあらず。或は(問)を教師と見(答)を生徒と見て可なり。或は(問)を甲と見(答)を乙と見ても可なり。(問)者は屢々質問をなし、又時々説明をも爲すなり。

一(答)とあるには二種あり。一は此處に記入すべき答の(答)者の已得の智識を以てして容易に返答し得べきものなるが故に(答)者をして復習かた／＼試に返答せしめんとして、殊更にその答を省きたるものなり。又、一は(答)者返答し能はずと假定して(問)者の説明を待ちたるものなり。

一例證を掲げてその次に問答を掲げたる、その問答は凡てその例證にのみ關したるものと知るべし。

一各項に擧げたる例證は出來得る限りは省略せざらんことを要す。

一人に依りて演繹的敘述を好むものあり、歸納的敘述を好むものあり。演繹的敘述を好むものは各項の結尾に掲げたる定義を先にし、前後にある例證と演習問題とを例として、研究すべし。

一本巻は演習問題は凡て永井氏の蒐集して増補したるものにして、その餘は凡て予の

敘述し整理したるものなり。

一本巻は中學校師範學校高等女學校生徒用教科書並に國語研究者の自修用書として編述したるものなり。教師用並に自修者の參考用としては予別に本巻の評釋を著したり。

明治三十三年一月

岡田正美識

新式日本文法上卷目次

第一編	序説	一	頁
第二編	思想	三	
第一章	思想の部	三	
第一節上	思想の主部	三	
	〔演習〕	六	
第一節下	思想の述部	七	
	〔演習〕	一〇	
第二節	思想の對部	一四	
	〔演習〕	一七	
第三節上	思想の補部	一八	
	〔演習〕	二二	
第三節中			

目次

○	思想の對部と思想の補部と	二四
第三節下	〔演習〕	二七
第二章	思想の素	三七
第一節	有意動作無意動作	三八
第二節	〔演習〕	三八
第三節	單獨動作係補動作係對動作	四四
第四節	〔演習〕	四七
第五節	爲相動作被相動作	五三
	〔演習〕	五五
	自己相動作使役相動作	六一
	〔演習〕	六一
	使役相動作使役相動作	六二
	〔演習〕	六七
	使役相動作被役相動作	六八

第六節	〔演習〕	七五
第七節	使役相爲動作使役相被動作	七六
第八節	〔演習〕	八五
第九節	被役相爲動作被役相被動作	八六
第十節	〔演習〕	九五
第十一節	存在	九六
第三章	〔演習〕	一〇〇
	狀態	一〇一
	〔演習〕	一〇四
	時	一〇五
	〔演習〕	一一四
	已了未了	一一五
	〔演習〕	一二五
	結語	一二六

第三編	定義解説	一二九
第一	言語	一二九
第二	言語の部	一二九
	主部述部對部補部客部	一二九
	〔演習〕	一二九
第三	完備思想不完備思想	一三二
	〔演習〕	一三二
第四	完備語不完備語	一三三
	〔演習〕	一三四
第五	感動語	一三五
第六	完全語	一三六
	〔演習〕	一三九
第七	文章	一四〇
	〔演習〕	一四一

第八
第九
第十

第八	語法	一四三
第九	文法	一四三
第十	語法と文法との異同	一四三

新式日本文法上卷目次終

新式日本文法上卷

岡田正美著
永井一孝補

第一編 序説

事物
存在状態動作
人
思想感動
顔容身振音聲
繪畫彫刻

宇宙間に種々の事物存在す。種々の事物は種々の状態を有し、又種々の動作を爲す。人あり。人に種々の機能あり。人、事物に感觸して、思想を起し、又、感動を起す。人、思想感動を、或は顔容に、或は身振に、或は音聲に、或は繪畫彫刻に、うつしいたすことあり。

言語

他人その顔容身振音聲繪畫彫刻に依りて我が思想感動を推知することあり。
此の如き場合に於ては、その顔容身振音聲繪畫彫刻の類を總括して言語といふ。但し、普通には、音聲にうつしいたしたるをのみ言語といふ。

(二)

思想の部

第二編 思想

第一章 思想の部

第一節 (上) 主部

(一)

鳥が鳴く。

(問)なくは何がなくなるか、なくものは何なるか。

(答)鳥なり。

(二)

花が咲く。

(問)咲くは何が咲くなるか、咲くものは何なるか。

(答)花なり。

(三)

第二編 思想

(三)

雪が白く。

(問) 白いは何が白きなるか。白きものは何なるか。

(答) 雪なり。

(四)

美しい鳥が鳴いてゐる。

(問) ないてゐるは何が鳴いてゐるなるか。鳴いてゐるものは何なるか。

(答) 美しい鳥なり。

(五)

黄色の花が咲いてゐる。

(問) 咲いてゐるは何が咲いてゐるなるか。咲いてゐるものは何なるか。

(答) 黄色の花なり。

(六)

英書を読むことは容易なることにあらず。

(問) 容易なることにあらずとは何が容易なることにあらずなるか。容易なることにあらずものは何なるか。

(答) 英書を読むことなり。

(七)

枯枝に鳥のとまりたる畫あり。

(問) ありとは何かがあるなるか。あるものは何なるか。

(答) 枯枝に鳥のとまりたる畫なり。

(八)

吉野山の花今盛なりといふ報知來れり。

(問) 來れりとは何が來りしなるか。來りしものは何なるか。

(答) 吉野山の花今盛なりといふ報知なり。

右の思想に於ける鳥・花・雪・美しい鳥・黄色の花・英書を讀むこと・枯枝に鳥のとまりたる畫・吉野山の花今盛なりといふ報知の類を夫々の思想の主部といふ。

思想の主部

〔演習〕

左の諸思想に就きて、夫々の主部を指示し、且つ、その理由を述べよ。

- 【一】 孝は百行の本なり。
- 【二】 人に交るには厚きを旨とせよ。
- 【三】 植物の根は土中に廣がる。
- 【四】 悪人より愛せらるゝは悪まるゝより危し。
- 【五】 少き時の過失は老いての後の悔となる。
- 【六】 拙者儀は東國邊の者にて候ふ。
- 【七】 缸瓦寨の役に於いて最も苦戦したる者は第十八聯隊の第一大隊なりき。

一大隊なりき。

- 【八】 東海道の大坂ステーションは西成郡曾根崎村に在り。
- 【九】 千丈の堤も蟻蟻の穴より潰ゆ。
- 【十】 人を誹るは不仁なり、且つ、吾に於いて益なし。
- 【十一】 柳原の邊に強盜法印と號する僧ありけり。
- 【十二】 馬は人に乗せて早く走り、牛は車を引きて遅く歩む。
- 【十三】 凡そ人、自身に事を爲さんと欲し、又は、他人と事を共にせんとする時には、其の時期を正しく守るべし。
- 【十四】 過度に心を遣ふものは、腦髓の力を費すこと甚しきを以て、終に不治の病を生じて、容易ならざる害を惹き起すに至らん。

第一節 (下) 述部

(一)

(七)

鳥が鳴く。

(問)鳥が何をするか、又は、如何にあるか。

(答)鳴く、なり。

(二)

雪が白く。

(問)雪がいかにあるか。

(答)白く、なり。

(三)

吾は今學校に行く。

(問)吾は何をするか。

(答)學校に行く、なり。

(四)

ラッド氏米國より來れり。

小供獨樂を弄ぶ。

(問)ラッド氏が如何にせしか。

(答)米國より來れる、なり。

(五)

(問)小供が何をするか。

(答)獨樂を弄ぶ、なり。

(六)

枯れたる薄野中に残りてあり。

(問)枯れたる薄が如何にあるか。

(答)野中に残りてある、なり。

(七)

紅葉の紅葉したるは花の咲きたるよりも美し。

(問)紅葉の紅葉したるは如何にあるか。

(答)花の咲きたるよりも美しきなり。

(八)

兄は電報の來るを待つて居ます。

(問)兄は如何にして居るか。

(答)電報の來るを待つて居るなり。

右の諸思想に於ける咲く白い今學校に行く米國より來れり獨樂を弄ぶ野中に残りてあり花の咲きたるよりも美し電報の來るを待つて居ますの類を夫々の思想の述部といふ。

思想の述部

〔演習〕

左の諸思想に就て夫々の述部を指示し且つその理由を述べよ。

【一】補正成は南朝の忠臣なり。

【二】心は清き水の如し。

【三】前車の覆るは後車の戒なり。

【四】東京は日本の首府にして、皇居及び諸官廳のある處なり。

【五】あの方は熱心に勉強したから見事に卒業しました。

【六】聖人は生れながら賢なり。

【七】孝の道に疎きはちろかなることの至なり。

【八】普通學は手近き學科を教授するものなり。

【九】君に仕へては、忠を盡し私を忘れ我が身を顧ること勿れ。

【十】塵積りて山と成る。

【十一】愛と敬とは鳥の兩翼の如く、車の兩輪の如し。

【十二】萬里の長城は支那帝國の北部に在り。

【十三】人の錯れるを見ては時々我が身を省るべし。

【十四】國民の風俗は其の常に嗜好する遊戯に關係すること多きものなり。

【志】世にわれぼめする人には、どかく未練なるものぞ多かりける。

第二節 演習

左の諸思想に就きて主部と述部とを指示し、且つその理由を述べよ。

- 【一】 志ある者は竟に事を成す。
- 【二】 無用の者入るべからず。
- 【三】 元兵が皇國を襲ひて敗れしは時宗の愛國心ありて之を攘ひし故なり。
- 【四】 此の道を知るものは案内せよ。
- 【五】 拙く行ふは巧に言ふに勝る。
- 【六】 鳥の羽うちて碧空を凌ぐは兩翼あるに因る。
- 【七】 胃の張りたるは飲食したるゆゑなり。

【八】 病起りて後、藥を用ひて病をせむるは養生の末なり。

【九】 事の成就せんことを望むものは自から之を爲すべし。

【十】 人若し一時に事業を爲さんとせば、却つて失敗するに至らん。

【十一】 萬里の長城は、今より二千百餘年前、秦の始皇帝の計畫に係り、五年の歳月を経て始めて成功せしものなり。

【十二】 長城の高大なることは、其の櫓樓を除きても、猶ほ大不列顛國の全家屋を建設し得べきほどなる莫大なる瓦石を以てしてすら之を營作するに不足なるほどなり。

【十三】 近來、ベースボール、ローンテニス、の如き活潑なる洋風の遊戯の頻に我が國に行はるゝに至りしは、大に喜ぶべき事なり。

【十四】 されども、之が爲に手足を毀傷するものゝ往々生ずるは甚だ喜ばしからざる事なり。

第三節 (上) 對部

(一)

猫が鼠を捕へた。

(問)鼠を捕へたるものは何なるか。何が鼠を捕へしか。

(答)猫なり。

(問)猫が捕へたるものは何なるか。何が猫に捕へられたるか。

(答)鼠なり。

(二)

正成計を以て大に賊兵を苦めたり。

(問)計を以て大に賊兵を苦めたるものは誰なるか。誰が計を

以て大に賊兵を苦めたるか。

(答)正成なり。

(問)正成が計を以て大に苦めたるは誰なるか。誰が正成に計

を以て大に苦められたるか。

(答)賊兵なり。

(三)

母娘を呼ぶ。

(問)娘を呼ぶものは誰なるか。誰が娘を呼ぶか。

(答)母なり。

(問)母が呼ぶものは誰なるか。誰が母に呼ばるか。

(答)娘なり。

(四)

義光笙はありやと時秋にとひたり。

(問)笙はありやと時秋に問ひたるは誰なるか。誰が時秋に笙

はありやと問ひたるか。

(答)義光なり。

(問) 義光が笙はありやと問ひたるものは誰なるか。誰が義光に笙はありやと問はれたるか。

(答) 時秋なり。

(五)

校長優等生に賞品を與へたり。

(問) 優等生に賞品を與へたるは誰なるか。誰が優等生に賞品を與へたるか。

(答) 校長なり。

(問) 校長が賞品を與へたるは誰なるか。誰が校長に賞品を與へられたるか。

(答) 優等生なり。

右の諸思想に於ける猫・正成・母・義光・校長の類は、前にいひしが如く、夫々の思想の**主部**なり。それに對して、この鼠賊

兵・娘・時秋・優等生の類を夫々の思想の**對部**といふ。

〔演習〕

左の諸思想に就いて對部を指示せよ。

- 【一】 兄は弟に本を教へて居ります。
- 【二】 君は賞を臣下に賜ふ。
- 【三】 訴訟人は代理權を委員に任す。
- 【四】 教師は生徒に宿題を課せり。
- 【五】 盲者蛇におぢず。
- 【六】 吾は親友の來らんことを望む。
- 【七】 汝は馬に乗ることを習へりや。
- 【八】 能ある鷹は爪をかくす。
- 【九】 汝は手勢三百騎を以て搦手を守るべし。
- 【十】 秀吉は朝鮮征伐を諸大老に謀れり。

【十二】 親として子を思はぬものは絶えて無し。

【十三】 或好事家一疋の蚤に銀製の大砲を曳かしめけり。

【十四】 頼朝は弟の義経に平氏を討たしめたり。

【十五】 畠山の庄司重忠は三日月といふ栗毛の太く逞しき馬に乗りたりけり。

【十六】 君子の先祖に篤きは榮を求むる爲にあらざ。

第二節 (中) 補部

(一)

女子、羽子をつく。

(問) 羽子をつくものは誰なるか、誰が羽子をつくか。

(答) 女子なり。

(問) 女子が何をつくか、女子がつくものは何なるか。

(答) 羽子なり。

(二)

左甚五郎といふ有名なる彫物師、此眠猫をほりたり。

(問) 此眠猫をほりたるは誰なるか、誰が此眠猫をほりたるか。

(答) 左甚五郎といふ有名なる彫物師なり。

(問) 左甚五郎といふ有名なる彫物師がほりたるものは何物なるか、何物を左甚五郎といふ有名なる彫物師がほりたるか。

(答) 此眠猫なり。

(三)

我は友人のかきかけし畫を貰ひ來れり。

(問) 友人のかきかけし畫を貰ひ來りしは誰なるか、誰が友人のかきかけし畫を貰ひ來りしか。

(答)我なり。

(問)我が貰ひ來りしは何物なるか。我は何物を貰ひ來りしか。

(答)友人のかきかけし畫なり。

(四)

誰もかのれの藝の他人に勝れたることを喜ぶ。

(問)あのれの藝の他人に勝れたることを喜ぶものは誰なる

か。誰があのれの藝の他人に勝れたるを喜ぶなるか。

(答)誰もなり。

(問)誰も喜ぶは何事なるか。何事を誰もよるこぶなるか。

(答)あのれの藝の他人に勝れたることなり。

(五)

我は今、日本鐵道會社の瀛車が矢板驛の北の箒川に於て烈風の爲に鐵橋上より河中に吹き墜され

たりとの電報に接したり。

(問)日本鐵道會社の瀛車が矢板驛の北の箒川に於て烈風の

爲に鐵橋上より河中に吹き墜されたりとの電報に接し

たるは誰なるか。誰がさる電報を受取りたるか。

(答)

(問)我は今何に接したるか。我が今受取りたるは何なるか。

(答)日本鐵道會社の瀛車が矢板驛の北の箒川に於て烈風の

爲に鐵橋上より河中に吹き墜されたりとの電報なり。

右の諸思想に於ける女子左甚五郎といふ有名なる彫物師我誰我等は前にいひしが如く、夫々の思想の**主部**なり。それに對して、この羽子この眠猫友人のかきかけし畫れの藝の他人に勝ること日本鐵道會社の瀛車の矢板驛の北の箒川に於て烈風の爲に鐵橋上より河中に吹き

思想の補部

思想の對部との別
思想の補部との別

墜されたりとの電報の類を夫々の思想の補部といふ。
 (註)對部と補部との相違せる要點は對部は常に生物
 にして、補部は常に無生物なり。また、對部は何々に
 云々せらるるといひかへ得ること普通なれども、補
 部は何々に云々せらるるといひかへ得ること普通
 ならず。是に依りてこの二者を識別すべし。

〔演習〕

左の諸思想に就きて補部を指示せよ。

- 【一】 丈夫たるものは忠義の志を有すべし。
- 【二】 是等の機械は人力を用ることを減ず。
- 【三】 桓武天皇延暦寺を建てさせ給へり。
- 【四】 兒童は教師の行狀に感染す。

- 【五】 藤房卿勅をうけ給はりて、楠正成をぞ召されける。
- 【六】 當村の人民學校を建てたり。
- 【七】 人に交るには篤きを旨とすべし。
- 【八】 朝廷は勅使として某侍従を遣はされたり。
- 【九】 汝を稱揚する言語を却くべし。
- 【十】 賣言葉ありども、買言葉を出すな。
- 【十一】 風俗習慣は人をして賢と爲り愚と爲らしむ。
- 【十二】 正直な商人は却つて多くの利を得る。
- 【十三】 兒童に讀書の能力を授くるは恰も智識の充滿せる倉庫の
 鍵を與ふるが如し。
- 【十四】 訥辯にして己が意を他人に徹底すること能はざるは言談
 に熟せざる罪なり。
- 【十五】 禮義はあまりに恭敬に過ぎて動作の錯亂するに至る事な
 からんを要す。

○對部と補部と

(一)

老婆、少年に昔話を話す。

主部は老婆、述部は少年に昔話を話すなり。

少年は對部なり。

昔話は補部なり。

(二)

少年、書を机にのせたり。

主部は少年、述部は書を机にのせたりなり。

書は補部なり。

机は補部なり。

(三)

熟柿、枝より落ちたり。

主部は熟柿、述部は枝より落ちたりなり。
枝は補部なり。

(四)

暴風雨の報、鹿兒島よりも高知よりも和歌山よりも來れり。

主部は暴風雨の報、述部は鹿兒島よりも高知よりも和歌山よりも來れりなり。

鹿兒島、高知、和歌山、いづれも補部なり。

(五)

義光、足柄山までは時秋を伴ひけり。

主部は義光、述部は足柄山までは時秋を伴ひけりなり。

足柄山は補部なり。

時秋は對部なり。

(六)

彼の人は永く病になやむ。

主部は彼の人の述部は、永く病になやむなり。

病は補部なり。

(七)

八重子、母に花見に伴はる。

主部は、八重子、述部は、母に花見に伴はるなり。

母は對部なり。

花見は補部なり。

(八)

八重子は菊太郎よりも三つ姉なり。

主部は、八重子、述部は、菊太郎よりも三つ姉なりなり。

菊太郎は補部なり。

〔演習〕

左の諸思想に就いて對部補部を指示し、且つ、その理由を述べよ。

【一】私は手紙を書く。

【二】鹿を追ふ獵師は山を見ず。

【三】爲朝數十騎を率ゐて都へ上る。

【四】秀吉公洛中の塚を御覽せられつ。

【五】藩主専ら善政を布かれけり。

【六】樵夫は米を買ふがために薪を賣る。

【七】井上殺氏一日ボアンナード氏を永田町の家に訪はれたり。

【八】吾は日頃君を兄として君に事へたり。

【九】武藏坊辨慶或老翁一人を具して参りたり。

【十】義經平家の軍を破りぬ。

【十一】季重こそ此の山の案内能く存知仕りて候へ。

【十三】 甲助をば稻刈に遣はし、乙松をば柴刈に遣はす。

【十三】 倫敦税關の收入額は英國諸海關の收入を合計せしものに等し。

【十四】 我等は我等の心を烈しく刺撃したる一事に會せり。

【十五】 正成は朝敵を追討すべきことを正行に遺訓せり。

第二節 (下) 客部

(一)

人々、散る花をながむ。

(問) 主部は何なるか。

(答)

(問) 述部は何なるか。

(答)

(問) 散る花は何部なるか。

人々、降る雪を見る。

(答)

(問) 主部は何なるか。

(答)

(問) 述部は何なるか。

(答)

(問) 降る雪は何部なるか。

(答)

人々、散る花を降る雪と見誤りたり。

(問) 主部は何なるか。

(答)

(問) 述部は何なるか。

(答)

(問) 散る花は何部なるか。

(答) 補部なり。

(問) 降る雪は何部なるか。

(答) 補部なり。

(問) 否。補部にあらず。前例と比較して見よ。

前例に於て、人々のながむるものは何ぞ、散る花ならずや。次の例に於て、人々の見るものは何ぞ、降る雪ならずや。散る花降る雪は人々のながむるもの、人々の見るものにて、而して無生物なり。されば、散る花降る雪は補部なり。本例に於ては如何。人々の見誤りたるものは何ぞ。人々は何を見誤りたるなるか。降る雪か、散る花か。人々の見誤りたるは降る雪にあらずして、散る花たるなり。而して、その散る花をば人々は如何に見誤りたるか。といふに、人々はそれを降る雪と見誤りたり。といふなり。

思想の補部との別
思想の客部との別

老人、松風を聞く。

(問) 主部は何なるか。

(答)

(問) 述部は如何。

(答)

(問) 松風は何部なるか。

(答)

されば、散る花は、前例に準して、補部なり。ともいふべし。されども、降る雪は決して前例に準して補部といふべきものにはあらざるなり。この降る雪の如きをば客部とよびて、對部補部と混同することなからしむ。

三者、趣の異なるところに注意すべし。

(二)

老人、琴の音を聞く。

(問)主部は如何。

(答)

(問)述部は如何。

(答)

(問)琴の音は何部なるか。

(答)

老人、松風を琴の音ときゝたり。

(問)主部は如何。

(答)

(問)述部は如何。

(答)

(問)松風は何部なるか。

(答)

(問)琴の音は何部なるか。

(答)

(問)老人は琴の音をば聞きたるにはあらで、實は松風をば聞きたるなり。この松風を如何に聞きたるか、といふに、琴の音と聞きたりといふなり。

(三)

荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤の四人を世に國學の四大人といふ。

(問)主部は如何。

(答)

(問)述部は如何。

(答)

(問)補部は如何。

(答)

(問)客部は如何。

(答)國學の四大人なり。

(問)その理由如何。

(答)

(四)

月が瀬の梅も最早満開ならんといへり。

(問)主部は如何。

(答)

(問)述部は如何。

(答)

(問)友人は何をいひしか。

(答)

(問)友人は何といひしか。

(答)月が瀬の梅も最早満開ならんといひたり。

(問)月が瀬の梅も最早満開ならんは補部たるべきか、客部たるべきか。

(答)

(五)

(五)

我は此山にかばかり松茸の多からんとは曾て思はざりき。

(問)主部は如何。

(答)

(問)述部は如何。

(答)

(問)我は何を曾て思はざりしなるか。

(答)此山にかばかり松茸の多からんことをば思はざりきとなり。

(問)本思想には然か、松茸の多からんことをばとありや。

(答)否。多からんとはとあり。

(問)多からんとはと多からんことをばとは意は等しけれども、考へかた異なり。されば、二者同一なり、とはいひ難し。もし、松茸の多からんことをばとあらば、その此山にかばかり松茸の多からんことは思想の何部なるべきか。

(答)

(問)然はあらで、此山にかばかり松茸の多からんとはとある以上は、之をば思想の何部といふべきか。

(答)客部なり。

右の諸思想に於て、どの辭にてうけたる降雪琴の音國學の四大人、月が瀬の梅も最早満開ならん、此山にかばかり松茸の多からんの類を夫々の思想の客部といふ。

〔演習〕

左の諸思想につきて客部を指示し、且つ、その對部又は補部にあらざる理由を述べよ。

【一】 人々、降る雪を散る花と見たり。

【二】 老人、琴の音を松風ときたり。

【三】 予等は主部と述部と補部とを學べり。

【四】 向うに見えたものを山だとは思はなかつた。

【五】 予は予を訪ぬしものを君ならんと云へり。

【六】 林高山、蒲生を世の人三奇士といふ。

【七】 良薬は口に苦しとは善き諺なり。

【八】 古人は女子と小人とは養ひ難しといへり。

【九】 事物の現象を直接に経験することを實驗といふ。

【十】 知らぬことは知らずと答ふべし。

【十一】 菅公は諱を道具字を三とぞ云はれける。

【十二】 人に交るには篤きを旨とせよ。

【十三】 足利殿の代に妙本阿彌陀佛といふものゝ世々刀磨く事を業とするありけり。

【十四】 音楽を學ぶことは好まねども音楽を聴くことは好めり。

【十五】 わに計らむ今日のこよひのかくばかり樂しかるべしとは。

思想の素

第二章 思想の素

第一節 有意動作無意動作

(一)

日 暮る。
犬 走る。

(問) 暮るは日の動作をいひ、走るは犬の動作をいふ。

さて、日の暮るゝは日が暮れんとする意ありて暮るゝなるか、又は暮れんとする意もなく、自然に暮るゝなるか。

(答) 意なく、自然に暮るゝなり。

(問) 犬の走るは如何之も、自然に走るなるか。

(答) 否、之は意ありて走るなり。

(問) 何故に日の動作は意なく、自然にして、犬の動作は意あるものなるか。

(答) 日は暮れよゝ。又は暮れまい、など思ひて暮るゝにあらず、自然に暮るゝなり。之に反して、犬は走ろゝと思ひて、さて走るなり。走らんと思はずば留まりて居るなるべし。され

ば、犬の動作は有意なり。

(問)然り。生物は凡て心(情)あり。動作せんとすれば、し、せざらんとすれば、せず。されば、生物のする動作は大方有意の動作なり。無生物は之に反して、皆心(情)なし。故に、その動作は固より有意なる筈なし。されば、無生物の動作は大方無意なり。自然なり。

生物(又有情物といふ)の動作無生物(又非情物といふ)の動作といふに注意すべし。

(二)

利根川、東に流る。

友人、西に去れり。

(問)東に流るは利根川の動作をいひ、西に去れりは友人の動作をいふなり。

さて、東に流るゝは意ある動作なるか、又は、自然の動作なるか。

(答)自然の動作なり。

(問)その理由は如何。

(答)利根川は無生物(非情物)なればなり。

(問)西に去れるは意ある動作なるか、又は、自然の動作なるか。

(答)意ある動作なり。

(問)その理由は如何。

(答)友人は生物(有情物)なればなり。

(三)

風、櫻に吹く。

小兒、笛を吹く。

(問)風の動作をあらはせる部は何れなるか。

(答) 櫻に吹くなり。

(問) 小兒の動作をあらはせる部は何れなるか。

(答) 笛を吹くなり。

(問) 櫻に吹くといふ風の動作は意ある動作なるか、意なき動作なるか。

(答)

(問) その理由は如何。

(答)

(問) 笛を吹くといふ小兒の動作は意ある動作なるか、意なき動作なるか。

(答)

(問) その理由は如何。

(答)

(問) 同じく吹くといふにても、その動作主が有情物(生物)なる

と非情物(無生物)なるとに依りて、意ある動作と意なき動作とにわかるゝことを知るべし。

(四)

雷、鎮守の森に落ちたり。

輕氣球、天に上る。

(問) 雷の動作をあらはせる部は何れなるか。

(答)

(問) 輕氣球の動作をあらはせる部は何れなるか。

(答)

(問) 雷のこの動作は意ある動作なるか、又は、意なき動作なるか。

(答)

(問) その理由は如何。

(答) (問) 輕氣球のこの動作は意ある動作なるか、又は、意なき動作なるか。

(答) (問) その理由は如何。

(五)

松の老木、風にたふれたり。
人、路傍にたふれたり。

(問) 松の老木のこの動作は意ある動作なるか、意なき動作なるか。

(答) (問) その理由は如何。

有意動作
無意動作

右の諸例に於ける如き、有情物(生物)の意ある動作を有意動作といひ、非情物(無生物)の意なき動作を無意動作といふ。

〔演習〕

左の諸思想に就きて有意動作無意動作を指示し、且つ、その理由を述べよ。

【一】 火燃ゆ。

- 【一】 小兒眠る。
- 【二】 私は手紙を書く。
- 【三】 花咲きて鳥鳴きぬ。
- 【四】 埋木石炭となる。
- 【五】 馬は人を乗す。
- 【六】 風戸を開く。
- 【七】 麥は蒔き、豆は蒔かず。
- 【八】 娘が母に似る。
- 【九】 蝶、花の上に戯る。
- 【十】 朱に交れば赤くなる。
- 【十一】 いで一うちと勇み立つ。
- 【十二】 知らざることば問ひ明むべし。
- 【十三】 牛に引かれて善光寺参り。
- 【十四】 馬鞭たれて早く走れり。

第二節 單獨動作・係補動作・係對動作

(一)

雪ふる。
 小兒なく。
 八重子字をかく。
 三郎犬をうつ。

(問)此等の動作は有意動作なるか、無意動作なるか。

(答)

(問)その理由は如何。

(答)

(問)雪の動作と小兒の動作と八重子の動作と三郎の動作とに於て、何處か異なるところがあるか。
 (答)雪はたい降るのみにて、他物に關係することなし。小兒も

たゞ自分にてなくのみにて、自分の外に關係なし。八重子は字を書くなり、字を新に書出すなり。されば、八重子の動作は自分の外にこの關係物あり。三郎は犬を打つなり、犬をうちて苦むるなり。されば、三郎の動作も亦自分の外にこの關係物あるなり。

(問)その關係物の字と犬とに何か差異あるか。

(答)犬は生物字は無生物なり。されば、三郎の動作は犬といふ生物に關係し、八重子の動作は字といふ無生物に關係す。

(問)然り。雪ふる、「小兒なく」には對部もなく、補部もなく、八重子字をかくの内には字といふ補部あり。三郎犬をうつには犬といふ對部あるなり。

動作の關係物の有無と、その關係物の生物(有情物)なると無生物(非情物)なるとの差異とに注意すべし。

(二)

風、烈しく吹く。

小供、早く走る。

老婆、菊の花を折る。

「玉」小鼠を捕へたり。

(問)此等の動作は有意動作なるか、無意動作なるか。

(答)

(問)その理由如何。

(答)

(問)此四動作に於て何處か異なるどころがあるか。

(答)あり。風の動作と小供の動作とは各々自分限の動作にて、他に關係なし。老婆の動作は菊の花に關係す。「玉」の動作は小鼠に關係す。而して、菊の花は無生物(非情物)、小鼠は生物(有情物)なり。

(問)然り。初の二つは思想の中に對部も補部もなく、從てその吹く走るといふ動作は他物に全く關係なし。次なるは、思想の中に菊の花といふ補部あり。而してその折るといふ動作は此補部菊の花に關係す。終なるは、思想の中に小鼠といふ對部あり。而して、その捕へたりといふ動作は此對部小鼠に關係す。

(三)

雀、囀る。

蜘蛛、巢をかく。

母子を抱く。

(問)各の主部は何なるか。

(答)

(問)此等の動作に於て、如何なるところが相似たるか。

(答)三者とも生物(有情物)の動作にて、即ち、有意動作なり。この點に於て、三者皆等し。

(問)此等の動作に於て、如何なるところが相異なるか。

(答)初なるは、自己限の動作にて、他に關係を有せず。次なるは補部に關係を有す。終なるは對部に關係を有す。この點に於て、三者相異なり。

(四)

我は昨夜恐しき夢を見たり。
鮎、急流を上りゆく。
死にたる鮎、水面に浮びたり。

(問)此等の述部は何々なるか。

(答)

(問)この三動作の相異なる點をいへ。

(答)

(問)この三動作の相似たる點をいへ。

(答)

(五)

三郎、光子に英語を教ふ。

教師、生徒に宿題を課したり。

我々は楠正成を南朝第一の忠臣といふ。

(問)光子英語生徒宿題楠正成南朝第一の忠臣等は夫々の思想の何部なるか。

(答)

(問)三郎教師我々の動作の相似たる點と相異なる點をいへ。

。

(答)此等の三動作は皆有情物の動作なるが故に、有意動作な

單獨動作
係補動作
係對動作

り。此點に於ては三者相等し。
三郎の動作は對部と補部とに關係し、教師の動作も亦對部と補部とに關係し、我々の動作は對部と客部とに關係す。補部に關係すると客部に關係するとの差異はあれども、なほ對部に關係する點に於ては三者相等し。

右の諸例に見えたる如き、自己限又は、そのもの限の動作、即ち、補部にも對部にも客部にも關係せざる動作を**單獨動作**といひ、補部に關係する動作を**係補動作**といひ、對部に關係する動作を**係對動作**といふ。

〔演習〕

左の諸思想につきて單獨動作・係對動作・係補動作を指示し、且つ、その理由を述べよ。

- 【一】 女子、羽子をつく。
- 【二】 人が笑ふ。
- 【三】 蝶、花に戯る。
- 【四】 毛虫が蝶となる。
- 【五】 一隊の兵士、門前を通行せり。
- 【六】 彼は夙に凡兒に秀でたり。
- 【七】 教師、文法を生徒に授く。
- 【八】 子供が池の中に石を投げた。
- 【九】 君は賞を臣下に賜ふ。
- 【十】 八重子、花見に母に伴はる。
- 【十一】 笑ふ門に福が来る。
- 【十二】 訴訟人は代理權を委員に任す。
- 【十三】 老人琴の音を松風とききたり。
- 【十四】 太郎は外で紙鳶を揚げる。

- 【十五】 林高山、蒲生を世の人、三奇士といふ。
 - 【十六】 上野の櫻、今日頃満開ならん。
 - 【十七】 こゝに嵐山にゆく涼車あり。
 - 【十八】 予は友人三四輩を伴ひて、昨日奈良見物に行きし。
 - 【十九】 雲、無心にして岫をいづ。
 - 【二十】 馬丁を呼べ、而して馬丁をして馬を此處にひき來たらしめよ。
- 第三節 爲相動作被相動作
- (二)
- 太郎、二郎を打ちたり。
- 二郎、太郎に打たれたり。
- (問) 太郎は如何にせしか。
- (答) 二郎を打ちたり。
- (問) 二郎は如何にせしか。

(答) 太郎に打られたり。

(問) 太郎と二郎とに異なるどころありや。

(答) 太郎は打ちたる方、次郎は打られたる方、太郎は爲出した方、次郎は爲られたる方なり。兩者反對なり。

(二)

母子を抱く。

子、母に抱かる。

(問) 母は如何にするか。

(答)

(問) 子は如何に。

(答)

(問) 母と子とに異なるどころありや。

(答) 母は抱く方、子は抱かる方、母はする方、子はせらる方。

なり。兩者反對なり。

(三)

光子、飼猫を玉とよぶ。

飼猫、光子に玉とよばる。

(問) 玉とよぶ呼び手は誰なるか、呼ばれ手は誰なるか。

(答)

(四)

トーマス教師、英語を三年級の生徒に教ふ。

三年級の生徒、トーマス教師に英語を習ふ。

(問) 前者に於て、英語を教ふるものは誰なるか。

(答)

(問) 英語を教へらるものは誰なるか。

(答)

(問)後者に於て英語を教ふるものは誰なるか。

(答)

(問)英語を習ふものは誰なるか。

(答)

(問)英語を教へらるゝものは誰なるか。

(答)三年級の生徒なり。

(問)否。事實に於ては英語を教ふるものはトーマス教師、教へらるゝものは三年級の生徒、なれども、この考方にては、生徒は教へらるゝ教師よりせらるゝにはあらで、生徒より進んで習ふなり。されば、生徒は習ふものなり。教へらるゝとの考はこの考方の中にはなきなり。何々すといふと何々せらるといふとに注意すべし。

(五)

校長、優等生に賞品として神皇正統記を與へたり。

優等生、校長に賞品として神皇正統記を與へられたり。

(問)神皇正統記を賞品として與へたるは誰なるか。

(答)

(問)神皇正統記を賞品として貰ひたるは誰なるか。

(答)

(問)神皇正統記を賞品として與へられたるは誰なるか。

(答)

(問)前者に於ける思想の部と後者に於ける思想の部とを比較せよ。兩者如何に相異なるか。

(答)

(問)與へたるものと與へられたるものと部との關係は如何。

(答)

爲相動作(爲動)

被相動作(被動)

右の太郎の二郎を打つ動作母の子を抱く動作光子の飼猫を玉とよぶ動作トーマス教師の生徒に英語を教ふる動作生徒のトーマス教師に英語を習ふ動作校長の優等生に賞品として神皇正統記を與ふる動作の如き、凡て云々する意義の動作をば爲相動作(又略して爲動)といひ、二郎の太郎に打たるゝ子の母に抱かるゝ飼猫の光子に玉とよばるゝ優等生の校長に神皇正統記を賞品として與へらるゝ等凡て云々せらるゝをも動作と認めて、之をばするの爲相動作に對して被相動作(又略して被動)と云ふ。この爲相動作と被相動作とは有情物の動作即ち有意動作にのみありて、非情物の動作即ち無意動作にはなし。序を以て之をいふ。心得おくべし。

〔演習〕

左の諸思想につきて爲相動作被爲動作を指示し、且つ、その理由を述べよ。

- 【一】 主人、下男を使ふ。
- 【二】 大將が軍を進める。
- 【三】 馬が人に乗られる。
- 【四】 鼠が猫に捕へらる。
- 【五】 私は手紙を書く。
- 【六】 子供が母に似る。
- 【七】 窓が風に打たる。
- 【八】 毛虫が蝶となる。
- 【九】 義貞、馬を深田に乗入る。
- 【十】 蝶が花に戯る。

【十二】 臣下が賞を君に賜はる。

【十三】 母が花見に八重子を伴ふ。

【十四】 老人、松風を琴の音と聴く。

【十五】 委員が代理権を訴訟人より任かせらる。

【十六】 生徒文法を教師に學ぶ。

第四節 自己相動作使役相動作

(一)

お君、眠る。

(問) 眠るものは誰なるか。

(答)

お竹、お君を眠らす。

(問) 眠るものは誰なるか。

(答)

(問) お竹は何をするか。

(答) お君を眠らすなり、お君を眠るやうにするなり。

(二)

太郎、二郎を打ちたり。

(問) うち手は誰、うたれ手は誰なるか。

(答)

三吉、太郎に二郎を打たしめたり。

(問) うち手は誰、うたれ手は誰なるか。

(答)

(問) 三吉は何をせしか。三吉の太郎・二郎に對する關係は如何。

(答) 三吉は只太郎に命じたるのみなり。太郎に命じて、二郎を打たしめたるなり。三吉自らは二郎を打ちせざりしなり。されば、三吉は太郎・二郎兩人の打つ打たる、關係より

はなれて、傍に立ちて居るなり。

(三)

「赤」玉を追ふ。

(問) 赤は犬の名、玉は猫の名なり。追ふものは何、追はるゝものは何なるか。

(答)

五郎「玉」を追ふ。

(問) 追ひ手は誰、追はれ手は誰なるか。

(答)

三郎「赤」に「玉」を追はす。

(問) 追ひ手は誰、追はれ手は誰なるか。

(答)

(問) 三郎は何をするか。三郎の「赤」玉に對する關係は如何。

(答)

(四)

母、花子に繪と造花とを學ばす。

(問) 繪と造花とを學ぶものは誰なるか。母か、花子か。

(答)

(問) 母と花子との關係は如何。

(五)

多田先生、弟子に額面に大文字を書かしめたり。

(問) 筆を執りて大文字を書きたるものは誰なるか。

(答)

(問) 筆者は大文字を何處に書きたるか。

(答)

(問) 大文字を書かせたるは誰なるか。

(答)

(問)多田先生弟子額面大文字の關係は如何。

(答)

使役相動作

自己相動作

右の諸例に見えたるお竹三吉三郎母多田先生の如く、その動作を自から爲るにはあらで、他に命令して、そのものをして、その動作をせしむるもの、舉動を使役相動作といふ。是に對して、右の例に見えたるお君太郎、赤五郎、花子、弟子の如く、自からその動作をするもの、舉動を自己相動作といふ。

使役相動作に於ては、右の諸例に於けるが如く、實際の動作をするものは我にはあらで、他のもの(我の命令を受くるもの)我が使役に従ふものなり。我はその實際の

動作の命令者使役者たるのみなり。此命令者使役者の舉動を使役相動作といふなり。

〔演習〕

左の諸思想に就きて使役相動作自己相動作を指示し、且つ、その理由を述べよ。

- 【一】 馬が人を乗す。
- 【二】 人が馬を走らす。
- 【三】 木下が大工に家を立てさせす。
- 【四】 子供が早く起く。
- 【五】 父子供を早く起きさせす。
- 【六】 教師が生徒に本を讀ませす。
- 【七】 能ある鷹は爪をかくす。

- 【八】鼠が騒ぐ。
- 【九】猫に鼠を捕へさす。
- 【十】猫鼠を捕ふ。
- 【十一】富人、貧民に食を得さす。
- 【十二】徳望ある人は衆人に尊敬せらる。
- 【十三】民をして飢に泣かしむ。
- 【十四】予をして之を爲さしめよ。
- 【十五】君みづから之を爲せ。

第五節 使役相動作・被役相動作

(一)

お竹、お君を眠らす。

(問)眠るものは誰なるか。お竹か、お君か。

(答)

お竹、お君を眠らす。
お君、お竹に眠らさる。

(答)お竹の舉動を適當にあらはすには前者適せり、後者適せず。お君の舉動を適當にあらはすには後者適せり、前者適せず。

(二)

(問)お竹の舉動とお君の舉動とに於て、何處か異なるどころあるか。

(答)お竹はお君を眠らすものなり。お君はお竹に眠るやうにせらるゝものなり。即ち、眠るやうにするものとせらるゝものとの差異あり。

(問)お竹の舉動とお君の舉動を適當にあらはすは左の二思想の何れぞ。

三吉、太郎に次郎を打たしめたり。

(問)次郎を打ちたるは誰、次郎を打たせたるは誰なるか。

(答)

(問)三吉の舉動と太郎の舉動とに於て、何處か異なるどころあるか。

(答)三吉は自分は打たず、太郎に命令して打たせたるなり。太郎は三吉に命ぜられて、自から次郎を打ちたるなり。されば、三吉と太郎とに就いて云へば、三吉は次郎を打たせたるものなり、太郎は三吉の爲に次郎を打たせられたるものなり。

(問)三吉の舉動、太郎の舉動を適當にあらはすには左の二者の何れが適すべきか。

三吉、太郎に次郎を打たしめたり。

太郎、三吉に次郎を打たしめられたり。

(答)

(三)

母、花子に繪と造花とを學ばす。

(問)繪と造花とを學ぶものは誰なるか。

(答)

(問)繪と造花とを學ばすものは誰なるか。

(答)

(問)繪と造花とを學ばせらるゝものは誰なるか。

(答)

(問)花子の舉動を適當にあらはすには左の二者の何れが適すべきか。

母、花子に繪と造花とを學ばす。

花子、母に繪と造花とを學ばせらる。

(答)

(四)

平二郎は今がた東京に居る兄の許に電信をかけた電信局までやられました。

(問)電信をかけたに行つた人は誰なるか。

(答)

(問)電信をかけたにやつた人は誰なるか。

(答)

(問)電信をかけたにやられた人は誰なるか。

(答)

(問)電信をかけたにやつた人の舉動を適當にあらはすには左の二者の何れが適すべきか。

平二郎は今がた東京に居る兄の許に電信をかけた電信局までやられました。
東京に居る兄の許に電信をかけたに電信局まで平二郎を今がたやりました。

(答)

(五)

かの不勉強家の石山石藏は今日學校にてトーマス先生に例の通り下讀のしてなかつた處を讀まされた。

(問)書を読んだ人は誰なるか。

(答)

(問)書を読ませた人は誰なるか。

(答)

(問) トーマス先生の舉動を適當にあらはせば如何

(答)

右の諸例に於けるお君太郎花子平二郎石山石藏の如く、他に使役せられてその動作を爲しめらるゝものゝ舉動を被役相動作といふ。

被役相動作

前項なる使役相動作はお竹三吉母等の動作の如く、夫々の動作を自からするにはあらで、自からはたゞ他に命令する他を使役するのみなる舉動をいひ、本項なる被役相動作はその命令せられ使役せられて、夫々の動作を自からするものゝ舉動をいふなり。

先にいひし自己相動作と此被役相動作と似たるところあり。混同

することなかれ。

〔演習〕

左の諸思想につきて使役相動作被役相動作を指示せよ。

- 【一】 太郎馬に蹴らる。
- 【二】 なく子、母をこまらす。
- 【三】 兵士、士官に進ませらる。
- 【四】 早魁は草木をして枯れ萎ましむ。
- 【五】 猫主人に鼠を捕へしめらる。
- 【六】 信長、秀吉をして中國を討たしめたり。
- 【七】 子供が父に早く起きしめらる。
- 【八】 主人は僕に庭を掃除せさす。
- 【九】 生徒が教師に本を讀ましめらる。
- 【十】 月が瀬の梅花は世人に賞賛せらる。

【十一】 甲助、乙太郎に道を教へしめらる。

【十二】 私は今主人の用で使に参ります。

【十三】 耻を知らざる人は世に棄てらる。

【十四】 三助、五郎市にひどくはぢしめられたり。

【十五】 静御前、頼朝に鶴ヶ岡の入幡にて舞を舞はしめらる。

第六節 使役相爲動作・使役相被動作

(一)

太郎、二郎を打つ。

(問) 太郎の動作は爲動なるか、被動なるか。

(答) 爲動なり。

二郎、太郎に打たる。

(問) 二郎の動作は爲動なるか、被動なるか。

(答) 被動なり。

愚一、太郎に二郎を打たす。

(問) 二郎を打つものは誰なるか。

(答)

(問) 愚一の太郎に對する舉動は何動作なるか。

(答) 使役相動作なり。

愚一、二郎に太郎に打たれしむ。

(問) 二郎を打つものは誰なるか。

(答)

(問) 太郎に打たるものは誰なるか。

(答)

(問) 愚一の二郎に對する舉動は何動作なるか。

(答) 使役相動作なり。

(問) 前例に於ける愚一の太郎に對する動作は使役相動作な

り。本例に於ける愚一の二郎に對する動作も使役相動作なり。この二つ全く相等しきか、又は何か異なるか。

(答) 太郎に對する愚一の動作は爲動をするもの(即ち、爲動者)に係り、二郎に對する愚一の動作は被動をするもの(即ち被動者)に係る。而して、二つとも、愚一よりいへば、等しく使役相動作なり。

(二)

母子を抱く。

(問) 母の動作は爲動なるか、被動なるか。

(答)

子、母に抱かる。

(問) 子の動作は爲動なるか、被動なるか。

(答)

父母に子を抱かす。

(問) 子を抱くものは誰なるか。

(答)

(問) 父の母に對する舉動は何動作なるか。

(答) 使役相動作なり。

父子に母に抱かれしむ。

(問) 子を抱くものは誰なるか。

(答)

(問) 母に抱かるものは誰なるか。

(答)

(問) 父の子に對する舉動は何動作なるか。

(答) 使役相動作なり。

(問) 父の母に對する動作と父の子に對する動作と相等しき

どころ相異なるところは如何。

(答)父の母に對する動作は爲動者に對する使役相動作なり。

父の子に對する動作は被動者に對する使役相動作なり。

而して、兩者とも使役相動作なり。差等かくのごとし。

(三)

トーマス教師、三年級の生徒に英語を教ふ。

(問)トーマス教師は爲動者なるか、被動者なるか。

(答)

三年級の生徒、トーマス教師に英語を教へらる。

(問)三年級の生徒は爲動者なるか、被動者なるか。

(答)

教頭、トーマス教師に三年級の生徒に英語を教へしむ。

(問)教頭のトーマス教師に對する動作は如何。

(答)

教頭、三年級の生徒にトーマス教師に英語を教へられしむ。

(問)教頭の三年級の生徒に對する動作は如何。

(答)

(問)教頭のトーマス教師に對する動作と三年級の生徒に對する動作との差等如何。

(答)トーマス教師に對する教頭の動作は爲動者に對する使役相動作、三年級の生徒に對する教頭の動作は被動者に對する使役相動作なり。對するところ異なるのみにて、使役相動作たることは一なり。

(四)

校長、優等生に賞品として神皇正統記を與ふ。

(問)被動者は誰なるか。

(答)

優等生、校長に賞品として神皇正統記を與へらる。

(問)被動者は誰なるか。

(答)

知事、校長に優等生に賞品として神皇正統記を與へしむ。

知事、優等生に校長に賞品として神皇正統記を與へられしむ。

(問)使役者は誰、爲動者は誰、被動者は誰なるか。

(答)

(問)右二思想の差異は如何。

(答)

(五)

松子、愛子より毛糸を貰ひたり。

(問)松子の動作は爲動なるか、被動なるか。

(答)

菊子、松子に愛子より毛糸を貰はせたり。

(問)菊子の動作は如何、爲相動作か、被相動作か、使役相動作か、被役相動作か。

(答)

(問)菊子の命によりて愛子が松子に毛糸を貰はれたり、どするとき、菊子の愛子に對する動作を適當にあらはさんには如何にいふべきか。

(答)

使役相爲動作

使役相被動作

使役者

爲動作

右の例に於ける愚一の太郎に對する舉動父の母に對する舉動・教頭のトーマス教師に對する舉動・知事の校長に對する舉動・菊子の松子に對する舉動の如き、使役者の爲動作に對する舉動を**使役相爲動作**といひ、愚一の二郎に對する舉動・父の子に對する舉動・教頭の三年級の生徒に對する舉動・知事の優等生に對する舉動・菊子の愛子に對する舉動の如き、使役者の被動作に對する舉動を**使役相被動作**といふ。

使役相爲動作并に使役相被動作に於ける愚一・父・教頭・知事・菊子等をその動作に於ける**使役者**といひ、使役相爲動作に於ける**太郎・母・トーマス教師・校長・松子**等をその動作に於ける**爲動作**といひ、使役相被動作に於ける

被動作

二郎子・三年級の生徒・優等生・愛子等をその動作に於ける**被動作**といふ。

〔演習〕

左の諸思想につきて使役相爲動作使役相被動作を指示し、又、その使役者爲動作被動作をも指示すべし。

- 【一】 人鼠に猫に捕へられしむ。
- 【二】 頼朝弟の義經に平氏を討せしむ。
- 【三】 教師、生徒に級長に學校の揭示を説明せられしむ。
- 【四】 父、二郎をして太郎に伴はれしむ。
- 【五】 校長、生徒をして教師に感化せられしめたり。
- 【六】 士官は兵卒をして下士の命に服従せしめたり。
- 【七】 秀吉諸將をして浮田秀家に命を傳へられしめたり。

- 【八】 秀吉、浮田秀家をして命を諸將に傳へしむ。
- 【九】 義經、那須與一に敵の扇を射さしむ。
- 【十】 遠藤盛遠、渡邊渡をしておのれが首を刎ねしめんとす。
- 【十一】 議長、議員に全院委員長を選舉せしむ。
- 【十二】 議長、議員に委員長に豫算委員會の結果を報告せられしむ。
- 【十三】 天皇、五位の藏人二人を召して民の愁を聽かしめ給ふ。
- 【十四】 此の時總督は敵兵に我が軍隊に降服せんとを勸告せり。
- 【十五】 主人、甲助を遣はして乙松より其の日の賃銀を拂はれしめたり。

第七節 被役相爲動作・被役相被動作

(一)

太郎、二郎を打つ。

(問) 太郎は爲動者なるか、被動者なるか。

(答) 二郎は爲動者なるか、被動者なるか。
 (問) 太郎は爲動者なるか、被動者なるか。
 (答) 太郎、二郎に打たる。
 (問) 二郎は爲動者なるか、被動者なるか。
 (答) 愚一、太郎に二郎を打たしむ。
 (問) 愚一は爲動者なるか、被動者なるか、はた、使役者なるか、被役者なるか。
 (答) 太郎、二郎は各爲動者なるか、被動者なるか。
 (問) 被動者は誰なるか。
 (答) 太郎、愚一に二郎を打たしめらる。
 (問) 被動者は誰なるか。

(問)爲動者は誰なるか。

(答)

(問)使役者は誰なるか。

(答)

(問)二郎の愚一に對する關係は如何。

(答)二郎は愚一に使役せらるゝものなり。されば、二郎は被役者なり。

(問)さらば、太郎の愚一に對する關係と二郎の愚一に對する關係との差等は如何。

(答)愚一は使役者、太郎も二郎も愚一に對しては被役者なり。此點に於ては、兩者相等し。されども、太郎はその動作の爲手即ち爲動者、二郎は被手即ち被動者なり。此點に於ては、兩者相異なり。

(二)

母、子を抱く。

(問)母は爲動者なるか、被動者なるか。

(答)

子、母に抱かる。

(問)子は爲動者なるか、被動者なるか。

(答)

父、母に子を抱かしむ。

(問)父は爲動者なるか、被動者なるか、はた、使役者なるか、被役者なるか。

(答)

(問)母子は各爲動者なるか、被動者なるか。

(答)

母、父に子を抱かしめらる。

(問)爲動者は誰なるか。

(答)

(問)被動者は誰なるか。

(答)

(問)使役者は誰なるか。

(答)

(問)被役者は誰なるか。

(答)母なり。

子、父に母に抱かれしめらる。

(問)被動者は誰なるか。

(答)

(問)爲動者は誰なるか。

(答)

(問)使役者は誰なるか。

(答)

(問)被役者は誰なるか。

(答)子なり。

(問)よからば、母の父に對する關係と子の父に對する關係との差等は如何。

(答)母は子に對しては爲動者にして、父に對しては被役者なり。子は母に對しては被動者にして、父に對しては被役者なり。爲動者と被動者との差異はあれども、使役者父に對しては兩者とも等しく被役者なり。

(三)

トーマス教師、三年級の生徒に英語を教ふ。

(問)爲動者は誰なるか、被動者は誰なるか。

(答) 三年級の生徒、トーマス教師に英語を教へらる。

(問) 爲動者は誰なるか、被動者は誰なるか。

(答)

教頭、トーマス教師に三年級の生徒に英語を教へしむ。

(問) 爲動者は誰なるか、被動者は誰なるか。

(答)

(問) 使役者は誰なるか、被役者は誰なるか。

(答)

トーマス教師、教頭に三年級の生徒に英語を教へしめらる。

(問) 爲動者は誰なるか、被動者は誰なるか。

(答)

(問) 使役者は誰なるか、被役者は誰なるか。

(答)

三年級の生徒、教頭にトーマス教師に英語を教へられしめらる。

(問) 爲動者は誰なるか、被動者は誰なるか。

(答)

(問) 使役者は誰なるか、被役者は誰なるか。

(答)

(問) トーマス教師の教頭に對する關係と三年級の生徒の教頭に對する關係との差等は如何。

(答)

右の諸例に於ける太郎の愚一に對する舉動母の父に對

被役相爲動作

する舉動トーマス教師の教頭に對する舉動の如き爲動者にして且つ被役者たるもの、舉動を被役相爲動作といひ、二郎の愚一に對する舉動子の父に對する舉動三年級の生徒の教頭に對する舉動の如き被動者にして且つ被役者たるもの、舉動を被役相被動作といふ。

被役相被動作

爲動者

被動者

使役者

被役相爲動作に於ける太郎母トーマス教師の如き爲動者をばその動作の爲動者といひ、二郎子三年級の生徒の如き被動者をばその動作の被動者といふ。又、被役相被動作に於ける太郎母トーマス教師の如き爲動者をばその動作の爲動者といひ、二郎子三年級の生徒の如き被動者をばその動作の被動者といふ。愚一父教頭の如き使役者は、兩動作に於て、各その

動作の使役者といふ。

〔演習〕

左の諸思想につきて被役相爲動作被役相被動作を指示し、又、その使役者爲動者被動者をも指示すべし。

- 【一】 二郎父に太郎を伴はしめらる。
- 【二】 太郎父に二郎に伴はれしめらる。
- 【三】 鼠が人に猫に捕へしめらる。
- 【四】 級長教師より生徒に學校の掲示を説明せしめらる。
- 【五】 生徒教師に級長に學校の掲示を説明せられしめらる。
- 【六】 生徒校長に教師に感化せられしめらる。
- 【七】 民主上に五位の藏人に愁を聽かれしめらる。
- 【八】 辯護士判官に被告に事實を述べべきを告げしめらる。

存在

(九六)

- 【九】 諸將秀吉に浮田秀家より命を傳へられしめらる。
- 【十】 浮田秀家、秀吉に諸將に命を傳へしめらる。
- 【十一】 甲助、主人に乙松に其の日の質銀を拂はしめらる。
- 【十二】 議員、議長に委員長に委員會の結果を報告せられしめらる。
- 【十三】 お花、お蝶にお光より毛糸を貰はれしめらる。
- 【十四】 薩摩守忠度、俊成に俊成の従者に何人なるかと問はれしめらる。
- 【十五】 弟子ども文覺上人に、どなたでござるか、と西行に問はしめられた。

第八節 存在

(一)

楠正成といふ人が昔あった。
 楠正成といふ人は今はない。

(問) 此二者は楠正成につきて何をいへるなるか。或は、正成が何かしたりといふことをいへるにもあるか。
 (答) 之は楠正成といふ人が昔あった、今はない、と、あったなかつた、あるないにつきていへるのみにて、正成が某事をしたしなかつた、する、せぬにつきていへるにはあらず。

(二)

柄御前といふ人は非常に強き婦人でありました。
 清少納言は有名な才女でありました。

(問) 柄御前といふ人は何をしたりといふなるか。
 (答) 何事をしたりといふにもあらず、たゞ非常に強い婦人であつたといふまでなり。
 (問) 清少納言は如何にといふなるか。
 (答)

第二編 思想

(九七)

(三) 瀛車や電信などは昔は全くなかった。此等は今は大抵の國々にはある。

(問) 瀛車や電信などは昔は如何にありきといふなるか。

(答) 昔はなかつた、といへるまでなり。あつたか、なかつたかといふに、なかつた、といふまでなり。

(問) 又、此等は今は如何にといふなるか。

(答)

(四)

人は一時間に三里位より多くは行けぬ。一時間に六里又は七里行ける人はない。一時間に三里や四里行くやうなそんなおそい瀛車は何處にもない。

瀛車は一時間に十里も十五里も行くのがある。

(問) 右の四者の内にて、云々のものがある、又は、ない、といふ考を述べたるものは何れなるか。

(答)

(五)

一時間に六里又は七里行ける人はないこともない。

この書の中には非常におもしろくないこともあり、又、非常におもしろくあることもある。

(問) 云々のものはある、云々のものはない、どの考をあらはしたるは、右の内の何れが何れなるか。

(答)

右の諸例に於ける如き、事物の有ること又は、無きことを

存在

(100)

そのものゝ存在といふ。
くはしきいへば、事物の有は存在にて、事物の無は非存在なり。今は此兩者を一括して、之に存在といふ名を冠らす。

存在
非存在

〔演習〕

左の諸思想につきて事物の存在をあらはせるものを指示せよ。

- 【一】 向うに一軒の茅屋あり。
- 【二】 学校には勉強する生徒と勉強せざる生徒とあり。
- 【三】 孝行は萬善の基なり。
- 【四】 東海道には五十三次とて重なる驛五十三ありき。
- 【五】 其處に往くものと還るものとあり。
- 【六】 日本には木造の家が多くござります。

337198

- 【七】 冠をかぶつても猴は猴である。
- 【八】 父は今山に行つてゐます。
- 【九】 世に神ありや、神なしや。
- 【十】 萬世一系の天皇の統治し給ふ國は我國の外には絶えてゐることなし。

- 【十一】 尊氏は豪傑だが忠臣ではない。
- 【十二】 三郎は世人の誹謗をも敢て省る意なし。
- 【十三】 身軀の健康なるは何よりめでたき寶なりと申すもの有之候。
- 【十四】 授業中に私語し顧視し又は喧騒するものありき。
- 【十五】 飢渴して食を乞ふものあり。凍寒して衣に泣くものあり。

第九節 状態

(一)

花が散る。

(101)

花がうつくし。

(問)二者異なるところあるか。

(答)花がちるは花が如何にするかをのべたるもの即ち花の動作をのべたるものなり。されども、花がうつくしは花の動作をいふにはあらで、花のうつくしき有様をのべたるものなり。二者この差異あり。

(二)

水が流る。

水が清い。

(問)二者異なるところあるか。

(答)

(三)

空が青い。

風が寒い。

(問)此二者は動作をあらはしたるものなるか、又は、有様をあらはしたるものなるか。

(答)二者とも有様をあらはしたるものなり。

(四)

鳴川の夕涼は誠にもしろし。

鳴川の夕涼はさほどにもしろからず。

(問)此二者は動作をあらはしたるものなるか、又は、有様をあらはしたるものなるか。

(答)

(五)

牡丹ほどきれいな花は少い。

牡丹よりもきれいな花はない。

状態

(104)

(問) 両者は何をあらはしたるか。

(答)

右の諸例に見えたる、うつくしい、清い、青い、寒い、おもしろし、少しの如き、事物の有様をその事物の状態といふ。

(注意) 此状態は先にいひたる動作存在とは全く別物なり。三者を混同すること勿れ。

状態

〔演習〕

左の諸思想につきて事物の状態をのべたるものを指示せよ。

- 【一】 富士山は高し。
- 【二】 日本海は深し。
- 【三】 家の側に生へてゐる松はちいさし。
- 【四】 父母の命に背くことはわるし。

【五】 人多き中にも人はなし。

【六】 良薬は口ににがい。

【七】 川風寒く、千鳥鳴く。

【八】 松青く、砂白し。

【九】 家貧しき者は志却りて固し。

【十】 試験の成績甚だ善し。

【十一】 祝ふ今日こそ楽しけれ。

【十二】 諸客酔うて興に入るらしい。

【十三】 北風身にしみていと寒し。

【十四】 花の中にては櫻が一番にうつくし。

【十五】 月のある夜道を一人行くはさびしきものからいと面白し。

第十節 時

(一)

(105)

鐘が鳴る。
鐘が鳴った。

(問)二者異なるどころあるか。

(答)前者は鐘が今鳴るをいふなり。鐘の鳴る音の今聞えてあるに當りて、鐘の鳴るをいふなり。後者は之と異なりて、今より以前に鳴ったといふなり。鐘の音の既に鳴り了りて今は最早その音の聞えぬに當りて、鐘の鳴りしことをいふなり。

(問)今より以前といふは昨日のことなるか、一昨日のことなるか、又は、去年のことなるか、何時のことなるか。

(答)昨日とも一昨日とも又は去年とも一昨年とも何時とも夫はわからず、ともかくも、今より昔のことなり。

(二)

雨が降る。
雨が降らう。

(問)二者差異あるか。

(答)前者は今雨がふるをいふなり。今目前に雨が降りてあるをいふなり。後者は後に雨がふらうといふなり。即ち、今は未だ雨ふりてあるにあらず、今より後になりて降るといふなり。今と今より後との時の相違あり。

(問)今より後といふは今夜のことなるか、明朝のことなるか、又は、明日のことなるか、明後日のことなるか、何時のことなるか。

(答)夫は何時といふことはわからず、ともかくも、今より後のことなり。

(三)

去年の十二月十三日に雪がひどく降った。
去る十月七日に駿州田子の浦に非常な津浪があつた。

(問)雪がひどく降つたといふは何時なるか。津浪があつたといふは何時なるか。

(答)去年の十二月十三日、十月七日。

(問)それは今よりは以前なるか、又は以後なるか。

(答)問はるゝまでもなく、今よりは以前なり、昔なり。

(四)

楠正成兵を率ゐて兵庫へ向ふ。

新田義貞二萬五千の兵を以て和田岬に陣す。

(問)楠正成新田義貞は何時夫々の動作を爲したるなるか。

(答)今。

(問)然らば楠正成は今尙存命なりや。新田義貞も亦今尙存命なりや。

(答)否、兩人とも既に死にたり。

(問)何時死にたるか。

(答)凡五百六十年前に死にたり。

(問)凡五百六十年前に死にたりとならば正成義貞の動作はその以前即ち未だ死なざりし時ならざるべからざらん、即ち凡五百六十年前又は五百六十一年前ならざるべからざらん。その五百六十年前又は五百六十一年前の動作を今といふは如何。

(答)五百六十年前のことを何故に今にしたるか、夫は知らず。されども、この考は全く今のこと、今目前のことをあらはしたるものなり。されば實際の事件は五百六十年も以前のことながら、殊更に今なりといひたるなり。

(問)さらば、五百六十年も以前のことなるやうにきこえしめんには如何に改めばよかるべき。

(答)左の通にせばよからん。

五百六十餘年の昔楠正成、兵を率ゐて兵庫へ向つた。五百六十餘年の昔新田義貞、二萬五千の兵を以て和田岬に陣した。

(問)然り、かく改むれば、正しく五百六十年前のことになるなり。さるを、元の如く向ふ陣すと云ひては、かくの如き昔の事にはならず、正しく目前のことゝなるなり。

何故に、かく昔のことをば今のことの如くにしたるなるか。誰かしれるか。

(答)

(問)此事易きことならず。よくきくべし。此事件は本来昔のこ

となるが故に、尋常の考方ならば、右改正の如くいへでは叶はじ。されども、さやうにいひてはたゞの話の如くにて興味少きが故に、殊更に右の如く云々すとやうにいひて、さて、正成の進みゆくところ義貞の陣して居るところを目前に見るやうにしたるなり。すなはち、わが目又は開手の目を今におきて而して正成義貞の動作を見るやうにするときは、事件は正しく昔の事件なるが故に、云々した云々であつたといへば、その思想には叶はざれども、かくては興味少き故に、わが目又は開手の目をその當時事件のありしその昔の時(に)うつして、而して正成義貞の動作を目前に見るやうにしたるなり。一言にていへば、昔を今にしていふなり。

(五)

之は戦記物に常に多し。よく注意すべし。

昨夜の話はおもしろくなかった。
 今日の話は大層おもしろい。
 明日の話は尙おもしろからう。

(問)三者の差異如何。

(答)

(六)

天、高く、地、低し。

地球は太陽を周り、月は地球を周る。

水は方圓の器に従ふ。

(問)此等は何時のことなるか。

(答)今のことなり。

(問)今に限りたることなるか。

(答)

(問)去年は天低く、地高かりしか、一昨年は太陽が地球の周囲をめぐりしか、明日は月、地球を周らざるべきか。來年よりは水は方圓の器に従はざるべきか。

(答)否。去年も今年も來年も一昨日も昨日も今日も明日も明後日も又は十年二十年百年二百年千年二千年の昔も千年百年千年萬年の後も常に天は高く、地は低く、地球は太陽を周り、月は地球を周り、水は方圓の器に従ふなり。後のことは勿論斷言することは出来ざれども、從來の有様に依りて推察するに、多分はかくのごとく不變なるべし。
 (問)然り。説の通りなり。此等は昔も今も變らず、又、後も變らざるべし。されば、此等は何時のこと、限りたることにはあらず、何時にても差支なきことなり。何時と限らず、何時にてもまかるは即ち常に然ることなり。されば、此等は恒の狀態、恒の動作といふべし。

過去 現在 未來 恒 時

時

右の諸例に見えたる如く、時に今昔後の三種と昔より今を経て後にまでわたるものとの四種あり。この昔をば過去といひ、今を**現在**といひ、後を**未來**といひ、昔より後にまでわたるを**恒**といふ。

この過去・現在・未來・恒の四者を動作存在状態の時といふ。

〔演習〕

左の諸思想に就て動作存在状態の時を定めよ。

- 【一】 人、花を見る。
- 【二】 書を読み又文を學ぶ。
- 【三】 只今學校より歸る。
- 【四】 朱に交れば赤く爲る。
- 【五】 日本及び支那は東洋の帝國なり。

(一一四)

- 【六】 我が軍、全力を以て敵兵を却く。
 - 【七】 今日は日曜日なれば楽しく遊ばん。
 - 【八】 東京大阪京都を日本の三府といふ。
 - 【九】 志あるものは竟に事を成す。
 - 【十】 ニュートンは非常に勉強家であつた。
 - 【十一】 昔和氣清麿といふ人ありけり。
 - 【十二】 悪人より愛せらるゝは悪まるゝより危し。
 - 【十三】 梅の花は咲きたれど鶯は未だ鳴かず。
 - 【十四】 馬は人を乗せて早く走り、牛は車を引きて遅く歩む。
 - 【十五】 今日によく勉強したれども作文を清書することを忘れたり。
- 第十一節 已了未了
- (一)
- 今がた鐘が鳴った。

今鐘が鳴る。

(問)二者異なるどころありや。

(答)前者は既に鳴りたるなり。後者は今鳴るなり。既に鳴りたるも今鳴るとの差あり。

(問)前者に於ては鐘の音は今なほ未だつゝあるにや、又は、今はその音は既に止みしにや。後者に於ては如何。

(答)前者に於ては鐘は既に鳴り了りたるものなるが故に、その音は最早しては居らず。後者に於ては鐘未だ鳴り了らず、鳴りつゝある最中なるが故に、その音は今なほ未だ居るなり。

(問)然り。前者に於ては鐘最早鳴り了りしなるが故に、その音は既にきえて今なきこえぬなり。後者に於ては鐘未だ鳴り了らず、鳴れる最中なれば、その音は今きこゆるなり。既に

に鳴り了りたるも未だ鳴り了らぬとに注意すべし。

(二)

先程友人は歸へて去つた。

私も今歸る。

(問)二者異なるどころありや。

(答)前者は已に歸つてしまつたるなり。後者は今かへるなり。歸りゆく途中たるなり。前者は既に歸り了りたるなり。後者は未だ歸り了らぬなり。

(問)然り。前者は歸るといふ動作を既に了へたるものなり。後者は歸るといふ動作を未だ了へざるものなり。動作の已に了りたるも動作の未だ了らぬとによく注意すべし。

(三)

ナポレオン第一世は文政四年にセント、ヘレナ島で病んで死んでしまひました。

隣家の病人は明後日頃は死にませう。

(問)二者の異なるところは如何。

(答)ナポレオンの死にしは文政四年にて、即ち七十九年の昔なり。隣家の病人の死ぬは明後日ころにて、今より後なり。即ち、一は過去のことにて、一は未來のことなり。この差あり。

(問)然り。一は過去のことにて、一は未來のことなり。この差あり。なほ、此他に、既に死に了りたるか、未だ死に了らざるか、換言すれば、最早生存しては居らざるか、又は、尙未だ存命なるか、之を考へて見よ。

(答)ナポレオンは既に死に了りたれば今は生存しては居ら

ず。隣家の病人は未だ死なず、死に了らず。されば、今尙存命たるなり。

(問)然り。前者は業に既に死に了りたるなり。後者は未だ死なぬなり。従て、死に了らざるなり。前者は過去のことなり。後者は未來のことなり。過去と未來と動作の既に了りたると未だ了らぬとの關係につきて考へて見よ。

(答)

(四)

今朝まで雨が降って居りました。
今もなほ雨が降って居ります。

(問)二者の差如何。

(答)前者は今朝まで雨が降って居た、といふなるが故に、此動作

は過去に屬し、後者は今尙降つて居る、といふなるが故に、現在に屬す。

(問)然り。なほ、雨が降りたりたりや、否や、即ち、雨が止みたりや、否や、といふ方より考へて見ば、如何。

(答)前者は今朝まで雨が降つて居りしにて、今朝より以後は雨止みたる様なり。後者は今尙雨降り居るが故に、勿論、今は未だ止まざる様なり。即ち、一方は既に降つてしまつたる様、即ち、降つて後既に止みたる様、一方は今尙降りつゝある最中にて、以後何分間何時間つゞきて而して了るか、即ち止むか、わからざる様なり。

(問)然り。前者は今朝既に降りたりたるなり。降るといふ動作了りて、雨は止みたるなり。後者は今尙降り居るにて、降る動作は何時了るとも知れず、今は尙了らざるなり。全く過去に屬するものに於ては動作已に了り、現在に屬するものに於ては動作未だ了らざるなり。こゝに注意すべし。

(五)

我は筆記帳を淨書した。

(問)淨書する動作は今既に了りたりや、否や。

(答)既に了りたり。

(問)何時了りたるか。

(答)何時なるかわからず。たゞし、今より以前に於て、即ち過去に於て、既に了りたるなり。

我は筆記帳を淨書す。

(問)淨書する動作は今既に了りたりや、否や。

(答)未だ了らず。今、現に淨書しつゝあるなり。

(問)いつ了るべきか。

已了・未了

(一一二)

(答)いつといふことはわからず。たゞし、今より以後、即ち未來に於ては了るなるべし。されど、未來のいつといふことはわからず。

今夜の八時ごろまでには我はこの筆記帳を淨書してしまはう。

(問)淨書する動作は今既に了りたりや、否や。

(答)未だ了らず。

(問)今淨書しつゝ居りや、否や。

(答)わからず。

(問)何故にわからざるか。

(答)今淨書してをり、といひてなき故なり。こゝには今夜の八時ごろまでには淨書してしまはうといひてあるのみにて、何時より淨書にとりかゝるといふことは全くいひて

なし。故に、今既に淨書にとりかゝりをるか、又は未だとりかゝりをらぬか、夫はわからぬなり。たゞ、淨書し了る時刻のみがわかりをるなり。

(問)そは何時なるか。

(答)今夜の八時、又は八時以前なり。今夜の八時ごろまでには、といへればなり。

モ一二三枚故、あと一時間許にて、私はこの筆記帳を淨書してしまひませう。

(問)淨書は何時より始めしなるか。

(答)何時といふことはわからず。但し、過去に於て始めしなり。

(問)今もその動作をつゞけてをるなるか。

(答)然り。過去に於て始めて、現在に於てもその動作をつゞけてをり。今より後もなほつゞくるなるべし。

(問)未だ了らざるか、何時了るべきか。
 (答)未だ了らざるなり。いつといふこと判然はせざれども、今より凡一時間許の後に於て了るべし、即ち一時間許の未來に於て了るべし。

右の諸例に於て見る如き、動作の已に了りたるをば動作の已了といひ、その未だ了らざるをば動作の未了といふ。動作の已了は過去に屬する動作に於て常にあり、現在に屬する動作に於てもまゝあり、未來に屬する動作に於ても亦なきにあらず。現在に於ける動作未來に於ける動作は通常未了なり。過去に屬する動作にして已了なるものは過去已了動作といひ、現在に屬する動作にして已了なるものは現在已了動作

已了
未了

過去已了動作

現在已了動作
未來已了動作

在已了動作といひ、未來に屬する動作にして已了なるものは未來已了動作といふ。

〔演習〕

左の諸思想に就きて動作の已了未了を檢し、又過去已了動作現在已了動作未來已了動作を指示せよ。

- 【一】 瀛車が新橋の停車場を出發しました。
- 【二】 兒童は此の話を喜ぶ。
- 【三】 太郎は只今學校へ行きました。
- 【四】 土佐坊、義經の館を襲へり。
- 【五】 人勉強せば志望のづから成就せん。
- 【六】 平家の陣には蠅すら翔り候はず。
- 【七】 桓武天皇、延暦寺を建てさせ給へり。

- 【八】 國會が開けたら一度傍聴に出かけよう。
- 【九】 諸卿御膳をあるして之を食ふ。
- 【十】 若し兒童に此の話を聞かせば大に喜ぶべし。
- 【十一】 兒童に此の話を聞かせたれば大に喜びたり。
- 【十二】 今夜準備しておいて、あすは早く出立してしまひませう。
- 【十三】 予、日に一二を脩むることを得しかば、積りて終に多きに至れり。
- 【十四】 私には其の事が充分にはまだ分かりませぬ。
- 【十五】 家に千金を積んでも、志が柔弱なら、事業を成就することはむづかしくあらう。

第三章

以上列擧したる如き種々の思想の素によりて、人は種々の思想感動を起し、また、屢々その思想感動をば言語に發

するなり。

順當に思想を音聲にうつし、い出すときは、その言語は通常先に擧げしが如き思想の部を具ふ補部對部客部は思想によりてはなきことあり。されども、他の影響に依りて屢々之を缺くことあり。例を擧ぐれば左の如し。

お早う御座います。

大層お涼しくなりました。

ア、驚いた。

オヤ、マア、どうなさいました。

忠臣は孝子の門に出づとかや。

君は君たらずとも、臣は臣たらざるべからず、といへり。

嗚呼、人生僅に五十年。

オイ、君、一寸。

サア、お早く。
マア、あなた、そんなことを。

言語

言語の部
言語の主部
言語の述部
言語の對部
言語の補部
言語の客部

第三編 定義解説

第一 言語

人の音聲を以て自己の思想感動を他人に通ずる、その音聲を言語といふ。

第二 言語の部

言語はそがあらはす思想に應じて夫々の部を具ふ。思想の主部・述部・對部・補部・客部をあらはす夫々の言語の部分を言語の主部・述部・對部・補部・客部といふ。

〔演習〕

左の例に就きて言語の主部・述部・對部・補部・客部を指示せよ。
【一】 光陰は流水の如し。

- 【一】 母娘に衣裳を着す。
- 【二】 此の海を琵琶湖と號す。
- 【三】 國民は武きを尙ぶ。
- 【四】 太郎は使の男に手紙を渡せり。
- 【五】 我は美しき木を庭に植ゑたり。
- 【六】 これは諸國修行の行脚にて候ふ。
- 【七】 鹿林に入る。
- 【八】 吾は友人を横濱に尋ねたり。
- 【九】 予は此の馬を左甚五郎が作りたりとは思はず。
- 【十】 先鋒加藤清正は既に深く朝鮮の内地に進み入りたり。
- 【十一】 奴婢は主人たる者を敬ふ。
- 【十二】 彼を呼び叱り、而してうて。
- 【十三】 九州地方を漫遊して昨夜無事歸宅しました。
- 【十四】 本日は誰々を御招きなされて、御敵手となされますか。

完備したる思想は必ず主部と述部とより成る。而してその

述部には

- 對部の具はることあり、
 - 補部の具はることあり、
 - 客部の具はることあり、
 - 對部と補部との具はることあり、
 - 對部と客部との具はることあり、
 - 補部と客部との具はることあり、
 - 對部と補部と客部との具はることあり、
- 又、此等の全く具はらざることもあり。

想完備思
不完備思想

第三 完備思想不完備思想
具はるべき部の凡て具はりたる思想を完備思想といひ、
具はるべき部の缺けたる思想を不完備思想といふ。

〔漢習〕

左の諸例につきて思想の完備不完備を指示し、且つ、その理由を述べよ。

- 【一】 いでく木賊刈らうよ。
- 【二】 書を讀む。
- 【三】 朝は早く起きよ。
- 【四】 猿引、猿をして三番叟を舞はす。
- 【五】 父、財産を譲りたり。
- 【六】 子に老を養ふ道を教ふ。

完備語
不完備語

- 【七】 家々の國旗は朝風に翻れり。
- 【八】 梢に鶯の多くむれ集りしを見き。
- 【九】 洛中洛外の堺を末代まで相定むべし。
- 【十】 天皇、正成を追悼して、正三位左近衛中將を贈らせ給ふ。
- 【十一】 人民を諭して業を起さしめんことを務むべし。
- 【十二】 或時は釣漁の夫となり、或時は黑白を争ふ。
- 【十三】 出でしは教師に矯正せられ、入りては父母に訓戒せらる。
- 【十四】 軀裁を作り、形状を飾るなどの事をせず。
- 【十五】 此内に馬を乗り入るべからず。

第四 完備語不完備語 (附省略躰)

完備思想をうつつしたる言語を完備語といひ、不完備思想をうつつしたる言語を不完備語といふ。
完備思想を言語にうつすに當りて、その思想の部の

中にて、必要の度少きものはまばく之を省略することあり。言語はこの省略の爲に不完備語となり得る。

この省略は我國語に於ては極めて普通のことなり。されば、その最も普通なるものに限りにて、便宜を以て、特に之を完備語の省略躰と見ておく。

完備語の省略躰

〔演習〕

左の例につきて完備語不完備語を指示し、且つその理由を述べよ。

- 【一】 熱心に文字を習ふものあり。
- 【二】 鼠を捕ふる猫は爪をかくす。
- 【三】 白きは染りやすし。

- 【四】 兒童は能く勉強す。
- 【五】 みづから往きて之を爲せ。
- 【六】 無用の者入るべからず。
- 【七】 友人、吾に手紙を贈れり。
- 【八】 父、其の子を教ふ。
- 【九】 かへすく、嬉しく對面したるかな。
- 【十】 あはれ、今宵の月のおもしろさ。
- 【十一】 時刻を移さず早く往け。
- 【十二】 雲の何處に月宿るらむ。
- 【十三】 三人集れば文珠の智恵。
- 【十四】 梅に鶯。
- 【十五】 春は花見、秋は月見。

第五 感動語

感動語

感動をあらはす言語を感動語といふ。

感動をあらはす語は通例不完備語なり。されば、今、便宜を以て、之をば特に感動語と命名して、他の不完備語と混同せざらしむ。

第六 完全語 (附省略)

完全語

完全なる思想を含蓄して之を他人に明確に傳へんに聊の不都合もなき完備語を完全語といふ。

此處にいふ完全は普通の度に於ける完全にして、極めて嚴密なる意義に於ける完全にはあらず。

普通には前項にいひたる感動語と本項にいふ完全語とを合して言語といふなり。されども、實はこの完全語のみが眞正の言語たるなり。

言語の定義

此の如く、感動語をば眞正の言語ならずとし、此完全語のみを以て眞正の言語とする以上は、先に擧げたりし言語の定義は當に左の如く改訂を加へざるべからざらん。

言語は、人間の調節ある音聲にて、人の之に依りて、自己の思想を明確に他人に通ずることを得るものなり。

以下言語といふは皆この眞正の言語、即ち完全語のこと、知るべし。必要なる場合の外は特に完全語といはず。

言語は常に主部と述部とより成る。而して、その

述部には

對部の具はることあり、

補部の具はることあり、

客部の具はることあり、
 對部と補部との具はることあり、
 對部と客部との具はることあり、
 補部と客部との具はることあり、
 對部と補部と客部との具はることあり、
 又、此等の全く具はらざることもあり。
 完備語の條下に附記したるが如く、完全なる思想を
 言語にうつすに當りて、その部の中にて必要の度の
 少なきものは之を省略すること、我國語に於ては極
 めて普通なり。されば、その類のものにして最も普通
 なるものは特に之を完全語の省略躰又は省略した
 る言語と見ておく。

完全語の省略躰

〔演習〕

左の諸例に就きて、完全語とまからざるものを指示し、且つその理由を述べよ。

- 【一】 左の諸例を解釋すべし。
- 【二】 嗚呼、悲しきかな。
- 【三】 恩を受けば必ず報いよ。
- 【四】 薄酒すゝめ參らせん。
- 【五】 翁の心にはいかでそむくべき。
- 【六】 明日禮服用出頭すべし。
- 【七】 如何なる御方に渡らせ給ふぞ。
- 【八】 親しき友人の今宵來よかし。
- 【九】 朝は五時に起き夜は十時に臥すべし。
- 【十】 過ちては改むるに憚るなかれ。

- 【十一】 名を廣めるは善けれども強ひて求めるは善くない。
- 【十二】 汝の欲する事を爲せ。
- 【十三】 余は君を兄上と仰がん、君は弟とも見給へ。
- 【十四】 明日授業終らば遠足せむ。
- 【十五】 世にわれぼめする人には、どかく未練なるもの多し。

第七 文章(附省略)

文章

言語を文字にうつしたるものを文章といふ。

感動語又はその他の不完備語を文字にうつしたるものは文章とはいはず。

不完備文

此等は別に不完備文などともいはず、いふべし。先に完備語の條并に、完全語の條に附記せしが如く、思想を言語にうつすに當りてその部を省略すること

文章の省略

と、我國語に於ては極めて多く、且つ普通なり。されば、夫等省略したるものをそのまま文字にうつすときは、夫等の文章は正しく不完備文となる。されども、夫等最も普通なるものに限りて、便宜を以て、夫等をば、本來の不完備文とは見ずして、完備文の省略、即ち文章の省略、と見ておく。

〔演習〕

左の諸例につきて、文章と不完備文とを指示し、且つ、その理由を述べよ。

- 【一】 吾は書を読み、汝は習ふ。
- 【二】 甲は大阪に、乙は京都に向へり。

- 【三】花も實もかぐはし。
- 【四】名取川を下りて仙臺に入る。
- 【五】己を正しうして然るのち人を責めよ。
- 【六】身を殺して義を全うす。
- 【七】支那語と日本語とは異なる所多し。
- 【八】此の度の成績は前のよりも好し。
- 【九】貝原益軒名は篤信通稱を久兵衛と云ふ。
- 【十】故郷へは錦を着て歸ると申すことこの候へば錦の直衣を御免候へ。
- 【十一】師は只磁石を見て方角を示し艦にありて柁を使ふ人の如きものと知るべし。
- 【十二】此の太刀いかなるさねよき鎧をも通しなんずと人毎に見せて誇りけり。
- 【十三】見よ、あのやつ、今胴斬りにぞしたる。

語法

言語の上にあらはれてある種々の定則を總稱して語法といふ。

第八 語法

【十四】月を見るにいろくあり。今思ひ出でたる事あり。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、ひとり隅に向ひて居たりしに、さる武士の一丁字も知らぬが月をつくくくと見て、月はわたりいく尺かあるべき。おのく考へて見給へといふ。

【十五】いとおもしろし。考へて見ん。

第九 文法

文章の上にあらはれてある種々の定則を總稱して文法といふ。

第十 語法と文法との異同

文章は本と言語を文字にうつしたるものなるが故に、文

語法と文法との異同

法と語法とは本と同一なり。然るに、言語は漸次變化し、文章も亦漸次變化す。而して、言語の變化と文章の變化とは常に相伴はず、屢々度を異にし、又、屢々途を異にす。是によりて、語法と文法と遂に大に異同を生ずるに至る。

英獨佛の現今の言語文章に於ては語法と文法と全く同一にして、我國の現今の言語文章に於ては兩者大に相違す。

新式日本文法 終

明治三十三年二月廿三日印刷
 明治三十三年二月廿六日發行

新式日本文法上卷

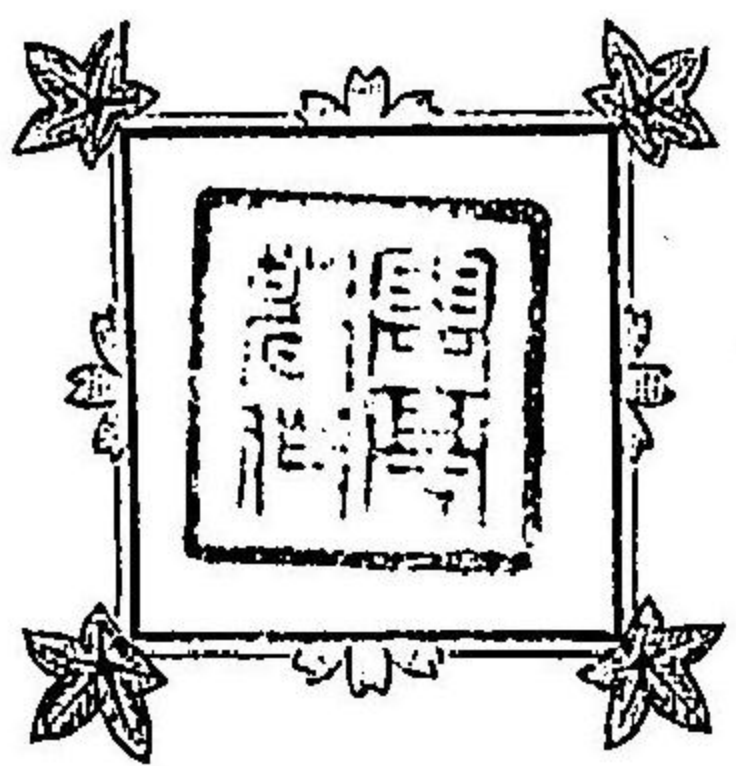
不許複製

定價金卅五錢

著者 岡田正美
 東京市麴町區飯田町六丁目廿二番地

發行兼印刷者 大日本圖書株式會社
 東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

右ノ代表者 宮川保全
 專務取締役



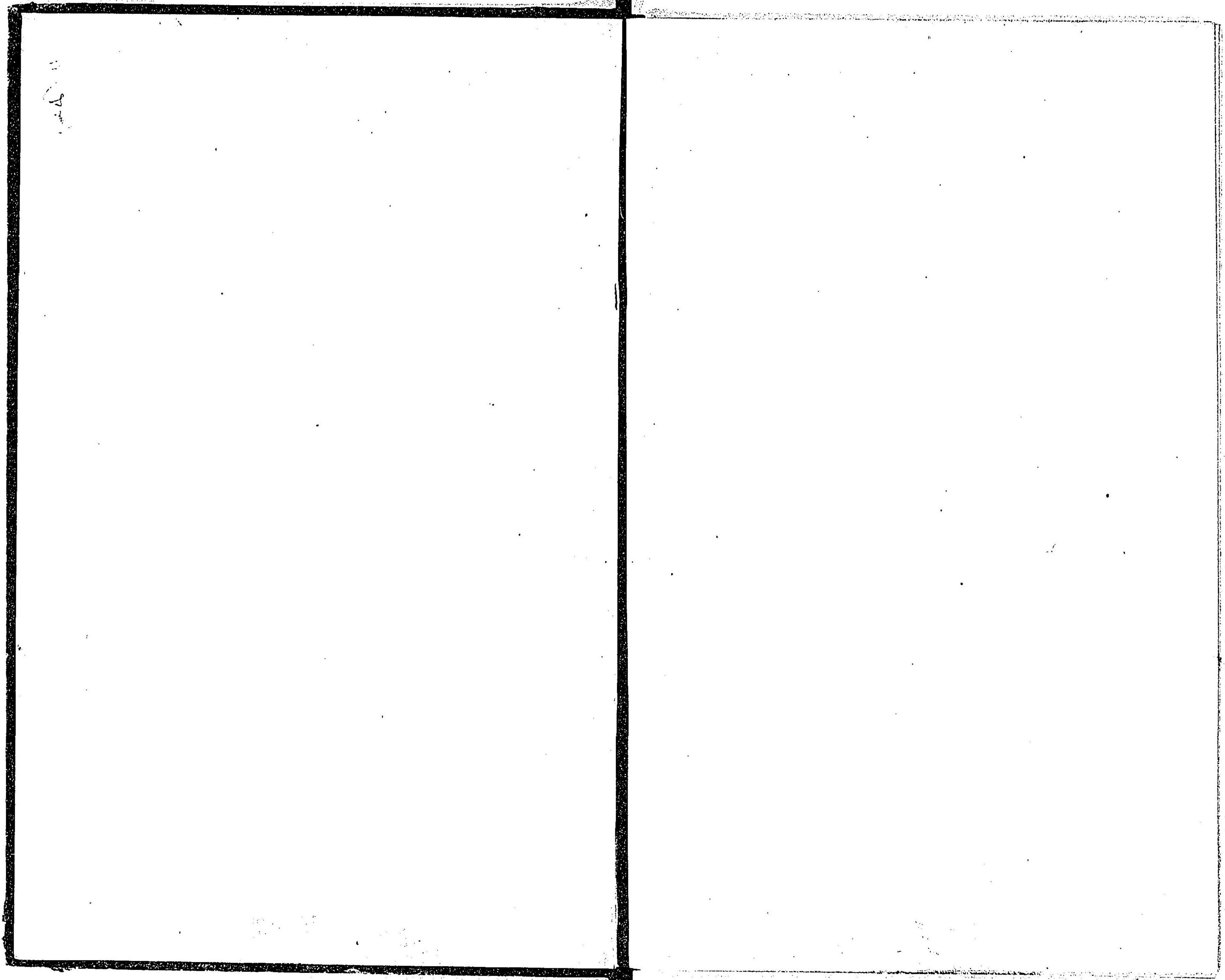
發行所

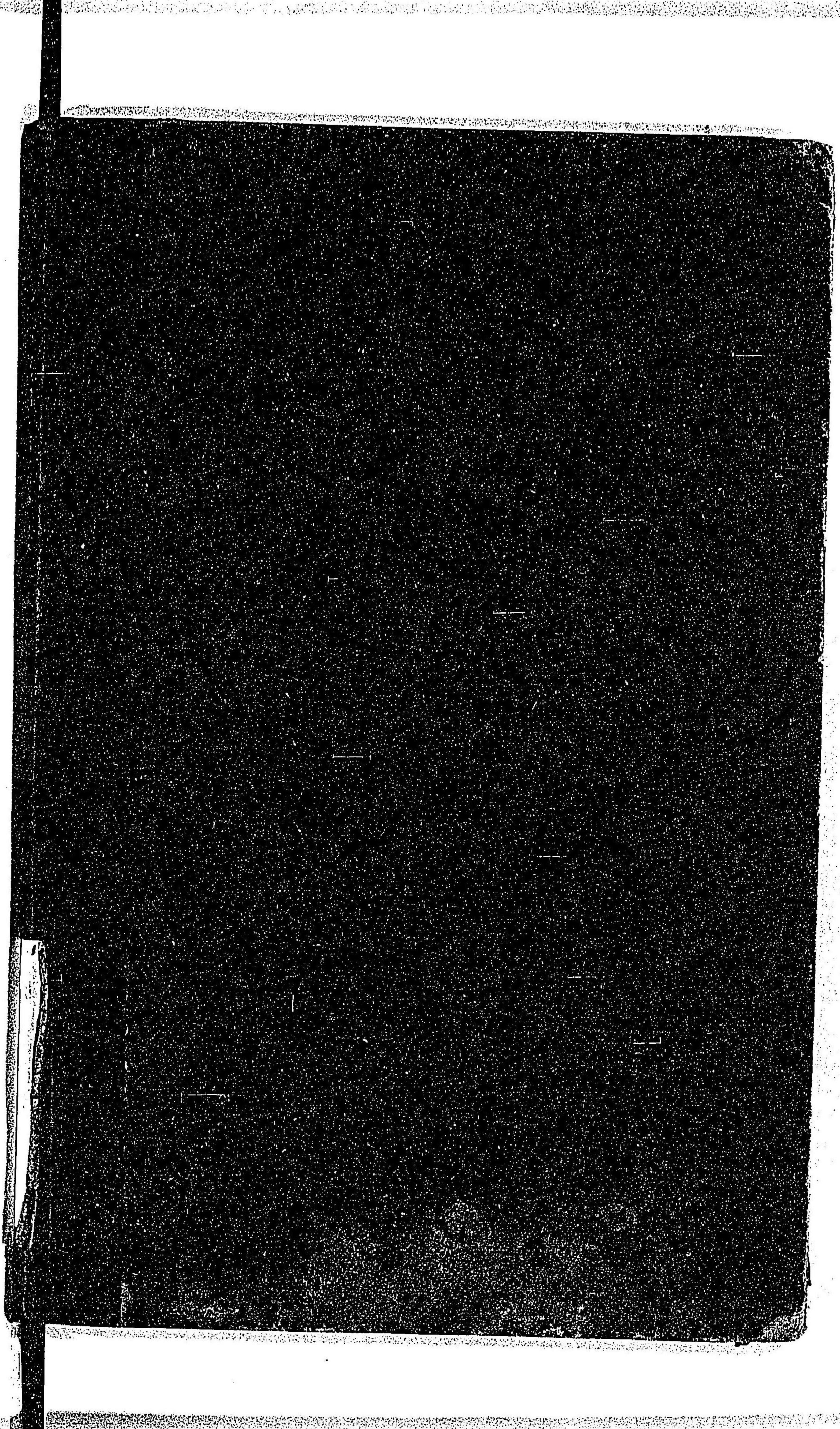
東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
 大日本圖書株式會社
 大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷
 同社

大日本圖書株式會社出版圖書特約販賣所

●東京府、丸善、嵩山房、水野、林、鶴喜、内田、大倉、長島、石川、青野、中央堂、中西屋、東京堂、播磨屋、芳流堂、目黒、共益商社、東海堂、北隆館、松村、穴山、二見、●大阪府、三木、梅原、柳原、石井、前川、岡島、丸善支店、吉岡、金川、岡本、花井、金尾、中井、小谷、中村、中川、吉東、松村、此村、田中、北村、●京都府、村上、藤井、松田、河合、●神奈川縣、田沼、丸屋、弘葉堂、●靜岡縣、川上、廣瀬、杉本、吉見、菅沼、齋藤、鈴木、●山梨縣、五明堂、柳正堂、清水、●愛知縣、川瀬、片野、●三重縣、柴田、關西圖書會社、岩田、安屋、山田、●長野縣、四澤、朝陽館、水野堂、柏原、丸山、南川、小林、奥村、昔川、今村、日新堂、文弘堂、土橋、廣文堂、戸塚、新井、●群馬縣、高橋、文江堂、文心堂、木田、塚田、中村、森尻、●埼玉縣、長島、水野、水村、田沼、●千葉縣、多田屋、朝野、堤、吉田、平野、中村、高寺、●栃木縣、内山、●茨城縣、川又、●宮城縣、高藤、伊勢、木文、●福島縣、田中、●岩手縣、佐藤、高橋屋、佐藤、●山形縣、牧野、八文字屋、素月、日向、伊藤、鈴木、白崎、西谷、山本、宮樫、西田、●秋田縣、土屋、成見、藤島、東海林、大澤、●青森縣、鐵田、伊藤、浦山、今泉、●北海道、小鹽、笠岡、白鳥、川南、池田、魁文會、山本、最上谷、山崎、●新潟縣、覺張、目黒、松田、室、中山、●富山縣、中山、學海堂、●福井縣、大北、品川、西村、●石川縣、近田、宇都宮、●兵庫縣、熊谷、中井、福浦、石田、木村、●奈良縣、卸賣社、●和歌山縣、平井、宮井、●岐阜縣、成美堂、郁文堂、岡安、遊文堂、●香川縣、宮島、開文堂、啓方、●德島縣、坂井、黑崎、●愛媛縣、向井、土肥、●高知縣、澤木、片桐、開成會、●廣島縣、鈴木、●岡山縣、武内、●島根縣、川岡、樹山、大盛、●山口縣、小原松、白銀、●福岡縣、菊竹、積善館、森岡、●熊本縣、長崎、梶原、●長崎縣、鶴野、集榮堂、安中、●大分縣、甲斐、守田、野依、梅津、●宮崎縣、松井、秋澤、津野、河野、●佐賀縣、河内、●鹿兒島縣、吉山、●沖繩縣、豐見城、石馬、仲井間、●臺北縣、三吉堂、●清國上海、ランパス

明治三十二年四月調





815
0444sN

078435-000-1

815-0444sN

新式日本文法 上卷

岡田 正美/著

M33.2

DAC-2121



